

えがおをつなぐ手話^{しゅわ}

大牟田市立手鎌小学校二年
久保なのは

わたしは、夏休みにずっと気になっていた手話についておべんきようをしてみました。

おべんきようをしていくうちに、手話を体けんしたいなという気もちがふくらんできて、おかあさんにさがしてもらいました。

コロナウイルスであつまるイベントがすくなくて、やつと見つかったのが社会ふくしそうごうセンターでひらかれる手話の会の方の会ぎの日でした。いつぱい本を読んで、本にのつていなかったことや、気になった手話のことをメモして、社会ふくしそうごうセンターに行きました。

「ちゃんとしつもんできるかな。」

と、しんぞうがドキドキしてたまりませんでした。おへやに入ると、ちようど手話の会がはじまっていました。ホワイトボードに、

「きようは、見学しゃの方がいます。小学校二年生です。」と、書かれていました。しばらくして、休けいじかんになり

ました。おへやの中があつくてタオルであせをふいていたら、一人のおじいさんが、えがおでせんすをもつてきてくれました。耳が聞こえない人と気づいたので、わたしはおぼえた手話で

「ありがとうございます。」

と言いました。すると、おじいさんが

「どうぞ、どうぞ。」

と手話をされました。なんだかこころが、ホワツとしてうれしい気もちになりました。

休けいじかんがおわると、いよいよしつもんのじかんです。

「小学二年生の久保なのはさんから、しつもんがあるそうです。どうぞ。」

と、しようかいがあり、前にではつぴようをしました。この日は、耳が聞こえない方が六名、目の見えない方が一名さんかされていました。目が見えない方は、手話を手でさ

わり読みとっていました。ふしぎだなと思っていると、手話の会の方から

「しよく手話というのよ。」

と教えていただきました。しつもんをしているときには、となり立たれている方が、内ようを手話になおして下さいました。手話をわたしに通やくして下さいる方もいてドキドキしたけれど、とてもたのしいじかんでした。

さいごに、おぼえた手話でじこしようかいをしました。みなさんにたくさんはく手をしていただけて、うれしかったです。

今は、マスクをしていて口もとが見えなくて、ひようじようもわかりにくいです。手話で会話をする人たちにとつて、とてもたいへんなことだなと思いました。

手話で耳の聞こえない方とお話しして、手話がかえつてくると、とてもたのしいです。手話で通やくをしている方は、かつこいいなと思います。わたしは、目が見えて、耳が聞こえることを、しあわせだなと思います。でも、せかいには、いろいろなしようがいをもつ方たちがたくさんいます。

わたしは、手話をおぼえて、耳が聞こえない人に、いろいろな音やこえをつたえられるような人になりたいと思いました。

子ども食堂は社会への窓口

名古屋市立若葉中学校 二年
 薛 知 明

私の家は、家族全員が自閉スペクトラム症という発達障害を抱えている。タイプはそれぞれ違うが、全員に共通しているのは、好きな分野についての知識や技能が突出し、学校の成績もトップレベルの一方で、情緒や社会性が非常に幼いということだ。主治医の先生方によると、私は「情緒が幼児並み」らしいし、父は「社会性が壊れている」と言われた。

母は、いじめ、虐待、場面緘黙、引きこもりなど幼児時代から今までの体験が頭の中で自動再生されていることで、時折興奮したりうつつになったりしている。私が小学四年生のとき、母が長いうつ状態に陥っていた。外国人の父は当時既に引きこもり生活になっていて、家族それぞれが自分のことで手一杯だった。以前から孤食が当たり前の家だったが、一時期食べるものが食パンしかない状態だった。夏休み中に私の体重が減ったことを担任の先生から聞いた母は驚いて学校の栄養士さんに相談したが、そもそも母は

「これで味付けするだけです。」

と説明していた。また母は、子ども食堂のフードパントリーで、

「この野菜は初めて見ました。どう調理すればいいですか。」

と熱心に聞いていたが、私は母が子ども食堂の人と話すのを見ているのも怖いので、母に、

「人に話しかけたり質問したりしないで。」

と頼んだ。数日後、母の相談を受けた「先生」からメールが来た。「先生」とは、私に通っていた療育センターの先生で、センター退職後は児童館で親子向けのソーシャルスキルの先生をしている人だ。

「お母さんは幼いころに家庭で学べなかった社会性を、いま子ども食堂で学んでいます。その邪魔をしてはいけませんよ。あなた自身の社会性を育てるためにも必要なことです。」と書かれていたので、怖いけれど我慢することにした。

やがて我が家の食事は、以前子ども食堂で出されたのと同じ味のスペイン風オムレツ一色になった。その後、具が日替わりで変化するようになり、この数年間、カップ麺ばかりだった父も喜んで食べるようになった。父は調子のよい日は私に英語や歴史・地理の講義をしてくれるようになり、来日前は中学の先生だったという父の、教壇に立つ姿

料理ができない。ただ、私の生活にあるものが加わった。「子ども食堂」だ。

私も母も、初めての場所や人が恐ろしいが、体の健康も大切だ。障害者用の福祉乗車券を利用して地下鉄やバスを乗り継ぎ、十か所近くの子どもの食堂の常連になった。どの食堂も開催日が月に一日から三日程度なので、それらを組み合わせ、週に二回ぐらいは栄養バランスの取れた食事をおなかいっぱい食べられるようになった。

母は、早い段階で私たちの障害のことを子ども食堂に伝えた。私は、スタッフの方がにこやかに話しかけてきても黙り込んでいたが、母は、スタッフ全員が親切で、暴力や暴言と無縁な場所なので安心できると言い、食堂の人と話すようになった。食事を終えて、

「この料理はどうやって作るのですか。」

と尋ねた母に、食堂の人はごみ袋から空の容器を拾い上げて見せ、

が浮かんでくるような気がした。

もともと食事目当てで通い始めた子ども食堂だが、母に人と会話する自信をもたらし、父をも変えた。私は今、子ども食堂に行くたびに、スタッフの人と挨拶や会話ができるように自分を奮い立たせている。食堂に早く到着したときは、フードパントリーの袋詰めのお手伝いもした。子ども食堂は、私たち家族にとって社会につながる窓口だが、他にもこのような窓口はいろいろある。「怖いけれどちょっと楽しみ」な気持ちでいろいろな窓口を覗いて様々な人たちとつながり、この社会の一員として成長していけたらと思う。

チャレンジド

鹿児島県立鹿児島工業高等学校二年

久保天清

私は生まれつき肘から先が無い、世間的に言う「障害者」だ。

人間の顔がみんな違うのは誰もが知っている当たり前のことだ。産まれたときの体重も身長も髪の毛の本数も、何もかも違う。自分と全く同じコピーなどこの世には存在しない。

ではなぜ、産まれたときに、手がなかったら、足がなかったら、「障害者」という枠に放り込まれてしまうのだろうか。それは、大多数の人々の当たり前なこと、その人たちにとって普通なことを、社会全体の当たり前にしてしまっているからだと思ふ。私のこの体は、私にとって普通の体であり、この体と共に生きることが、私にとって当たり前のことである。もちろん自分の腕を見て、「障害だ」なんて思つたことは、生まれてから一度も無い。なのに周りの人々は「可哀想」「不自由そう」というような見方をし、「君は障害があるからこの作業は出来ないね。」などと決めつ

にならないくらい多かつた。その分、足への負担も多くなつていた。さらに、移動教室の機会も大幅に増えたため、十分間の休み時間で、授業中に書ききれなかつた板書を書写し、靴下を履き直し、次の授業の準備をして教室移動までやり切るのには正直厳しいなと思つた。そこで私は腕で字を書く練習を始めた。スピードは足よりも格段に上がるが、人に見せられるような字ではなかつた。綺麗に早く書く。その練習を繰り返した。腕を痛めることもあつた。タコもできた。しかし、全く苦痛では無かつた。その努力は自分にとって必要なものであり、当たり前のことであつたからだ。その甲斐あつて、最低限綺麗に、早く字を書けるようになったし、休み時間にも余裕が生まれた。周りの同級生たちとも、なんら変わりのない学校生活を送れるようになった。

部活動も始めた。小学校の時、クラブ活動で少しだけしかこともあつた、ソフトテニス部に入った。ラケットは左脇に挟んで持つことができた。ボールも右腕と顎で挟んで持つた。サーブは顔より上にトスを上げることが難しかつたので、膝くらいの高さで打つカットサーブにした。みんなと同じ練習もこなした。その甲斐あつて公式戦で勝つこともできた。先輩方が引退し、新チームになると、キャプテンを任せて頂いた。チームの代表として貴重な経験をたくさんすることができた。最初はたくさんの人に、「本当に出

けられることもあつた。私はそれがとても悔しかつた。そんなことは無いからだ。考え方、工夫の仕方次第で可能性は広げられるということを知っていたからだ。だからこそ私は、示したいと思つた。自らの生き方で、生まれ持つた体で、自分なりに生きることが、当たり前のこと、普通のことであるということ。

小学生の時、私は足で字を書いていた。腕で字を書く方法も試したが、早く書ける分、丁寧さが損なわれたため早い段階で足を使い始めた。左足の親指と人差し指で鉛筆を挟み、紙がずれぬよう右足で押さえながらという方法だった。硬筆展で入賞したこともあつたため、私の字だけが、極端に汚かつたということはなかつたと思う。そんな自分のことを理解してくれた先生方や友人の支えもあり（ながら）、なんとか無事に小学校を卒業することができた。

中学は特別支援学校ではなく、近所の公立中学に入學した。しかし、中学の板書の量は小学校のものとは比べものになるのか」と心配された。しかし、そんな時母は、「あんたはやればできるんだよ」と、何度も何度も背中を押してくれた。結局のところ工夫の仕方でもなつたのだ。自分がやりたい事があり、それができるように必死に努力する。その大切さを、中学校でのたくさんさんの活動を通して感じることもできた。

高校は、鹿児島工業高校に入學した。将来建築系の仕事に就きたいという夢を叶えるため、そして大好きなソフトテニスの強豪校であつたからだ。部活動の練習の質は格段に上がり、授業での実習も、専門系の高校ということもあり、中学校の時とは比べものにならないほど繊細な作業が増えた。正直まだまだ難しいこともたくさんある。上手くキーボードを扱えなかつたり、木材を腕で押さえながら鋸を挽けなかつたり。課題は山積みだ。でも、夢を叶えるために必死になつて努力するのは誰にとっても当たり前。手がないからなんだ。挑戦すれば必ず結果がついてくるのだ。そんな私の背中を押してくれる人がある。そんな私を支えてくれる人がある。そんな私を見て、「自分も頑張ろう」と思ってくれる人もいる。

私はこれからも示していきたい。「障害者」というレッテルを貼られた人間でも、生まれ持つた体で、自分なりに生きれば、努力を惜しまず挑戦し続けければ、夢を叶えることが出来るということ。

私の想い

わたし おも

榮ひより

さかえ

これは私の幼少期の想いを今思えばこうだったのかな、と十八歳の私が障がい者との関わりについて考えたものである。

私は小さい時からマンションに住んでいる。同じマンションに同世代が多く、当時は幼稚園が終わってからみんなでマンションの下の公園で鬼ごっこやかくれんぼ、体を動かして遊ぶことが定番だった。ある日、今までは一番自分たちが年下だったその公園に一つ年下の子たちが顔を覗かせたのである。双子の女の子だった。一人は自分たちと同じ二つの足で立っているが、もう一人は歩行車がないと歩けない子だった。小さいなりに自分たちとは違うという違和感を覚えたのが今でもおもしろい出せる。

「一緒に遊ぼう?。」
と一番にその子に声をかけたのは私だった。その時は双子の子たちよりもその子たちのお母さんがすぐくよろこんでいた。幼稚園が終わった後、毎日のように遊んだ。歩行車

「俺に近づいてくるな!。」

と言ったのである。歩行車の子はしゃべることは出来ないが、普段からのお母さんの熱心な教育のおかげもあり、理解することはきちんとできる子だった。頭もいいし、気が利くし、優しくて要領のいい子だった。その言葉を聞いてその子は眉間につまんだ右手の二指の指先を当てて頭をさげながら顔の前に構えた右手を少し前へ出して申し訳なさそうな表情をしてその場を去った。これは

「ごめんね」

という言葉を表していた。心臓がドキドキしながら見ていたのを覚えている。わくわくのドキドキではなく、悪いことがバレてしまったようなドキドキに似てたと思う。その子がある場から居なくなるとその男の子を始め、隣にいた男の子その周りの男の子、その場の男の子たち全員が悪者を倒したかのように笑いあっていた。今思えば少なくとも私を含む女子たちは

「近づくな」

なんて思っていないなかったしむしろみんな妹をお世話するように慕っていたのだから追いかければよかったのだ。だけど誰一人足が動かなかった。動かなかったというより動かそうとしなかつた。誰もこの時は、この一瞬の出来事からどんなにその子をきずつけたか分かっていなかった。それからその公園にもあまり行かなくなり、気づけば私たちは

で鬼ごっこもしたしかくれんぼだった。

夏は蝉と一緒に捕まえたし、冬は雪だるまを作った。

そんな日常が崩れ始めたのは私たちの学年が小学校一年生になった頃だった。今までは普段から歩行車がないと歩けない女の子に心のどこかでみんな違和感を感じていたものの、あえてくちに出すことはなかった。その理由は出会った時から歩行車だったからそれで慣れていたのかもしれないし、小さかったのもそんなこといい意味でどうでもよかつたのかもしれないし、あるいは自分の親から事情を聴いていたのかもしれない。日常が一気に壊れたきっかけはある男の子の発言だった。小学生に上がった私たちは色んな子、いろんな環境から刺激をいっぱい受け、自分たちがどれだけ小さい世界で生きていたのかを思い知ったのである。前ほどあそぶことが少なくなってきたものの、下の公園にはよく顔を出していた。その時に男の子が歩行車の子が寄ってくるのを見て、

一年生の春休み、小学二年生になろうとしていた。ということは春から双子の女の子たちは小学一年生になるのだ。春休みに、自分の親、その双子のお母さんの集団がえらく盛り上がりつつあるのを見つけた。後から聞いてみると、歩行車を使っている女の子は障がい者手帳一級を持っていて、ふつうは支援学校でないと入学できないのだが、双子ということやその子の頭の良さ、周りからの声や親の熱心な頼み込みにより、同じ市立の小学校に入学することが決まったのである。ただし、いろんな条件が付いていた。例えば送り迎えは親がきちんとすること、体育はすべて見学、席は一番右の前で固定、休み時間は教室待機、など相当窮屈な条件ばかりだった。下半身麻痺、言語障がいがある子が普通の市立の小学校の普通学級に通うということはこういうことなのである。今思うのは、これは合理的配慮と捉えられるのか、不当差別に当たると言うかということである。私の今の答えは不当差別に当たると言う答えである。

ここからは少し双子の親に直接聞いた話である。私が小学校三年生の時、この双子が小学校二年生に上がったとき、良いほうに事が動いた。校長先生が変わったのである。それまでは普通学級に入れたことを後悔していたそうだが、双子だからと出来るだけ同じようにすごさせてあげたい一心でこの小学校に入学させたが、あまりにも他の子との差を実感させられる毎日、窮屈すぎる条件が逆にこの子に

辛い思いをさせていると毎日家で自分を責める一方だったそうだ。

春、女性の校長先生が赴任してきた。この方はその時代には珍しく障がいに対してすぐく理解がある先生だったと思う。今までの条件をすべて排除してくれた。まず必ずしも親が送り迎えする必要はなくなった。晴れている日、いける！と思った日は同じマンションの子や自分の双子とくればいい。

「そんなのは慣れだからきつとそれが普通になる。」
といていたそうだ。その他、体育はできる程度で補佐の先生をつけてする、席は目が悪いわけじゃないからみんなと同じように席替えをする、など合理的な配慮を行っていた。でも、いきなりこうなったわけではない。春休み明け、私が小学三年生のとき、全校集会が行われた。その時校長先生がこの双子の子の名前と学年を出し、障がいの程度や、自分の障がい者に対する考え、窮屈すぎる条件を付けられている現実、これからどうするべきか小学生の私たちに分かりやすいように説明してくれたのだ。私は事前にこのことを聞いていたのでびつくりしなかったが周りの子たちがザワザワしていたのを覚えている。そして先生の考えに賛成してくれる人は拍手を下さいという声と共に大きな拍手が体育館に広がったのを覚えている。私がこの体育館でびつくりしたのはこのことではない。その拍手

のあとに、当時一年生だった、

「俺に近づくな！」

と言い放った男の子がその全校集会でその場に立ち上がって大きな声で謝りだったのである。ひたすらごめんなさいといっていただけだったが校長先生やその双子の子の顔がほっこりしていたのを覚えている。それから毎学年年が上がるたびに校長先生は同じ話をした。新一年生が入ってくるからである。でも今思えばこれは新一年生のためだけでなく、私たちに初心を忘れさせないためであったのかもしれない。

こんな幼少期からの出来事を踏まえて私が一番心がけていることは身体障がい、精神障がい、障がいの有無に関係なくまず初めは顔を見て笑顔で挨拶をすることである。これはこの校長先生の教えだった。この作文を書いて今の自分を見つめ返してみる。この、笑顔で挨拶だけは忘れたことがない。ときどきマンションでみる歩行車の女の子は変わらず今も歩行車で歩いている。私も変わらず笑顔で話しかけている。障がいを持っているからと言ってなにも変わることはない。一人の人間一つの心をもっていることに変わりはない。私はこの考えを心の根っここの部分に植え付けてくれた校長先生に感謝し続ける。